

氏名（本籍）	手塚沙織（栃木県）	
学位の種類	博士（芸術）	
学位記番号	甲博第8号	
学位授与年月日	平成28年3月20日	
学位授与の条件	学位規則第4条第1項該当	
学位論文題目	透明技法における空間表現の研究 ～青と銀箔の重層構造による空間表現～	
論文審査委員	主査 本学教授	大 沼 映 夫
	副査 本学教授	田 中 久美子
	副査 本学教授	宮 北 千 織
	副査 本学特任教授	荒 井 孝
	副査 女子美術大学教授	熊 谷 宗 一

[論文内容の要旨]

第1章 序論

第2章 現代における空間表現と技法上の問題

第3章 手塚沙織作品の論考

第4章 制作および技法

第5章 箔に関する実験と研究

第6章 絵画作品

第7章 結論

本論文は、自作品に基づく7章構成とする。まず、第1章は、本論文執筆における序論である。第2章では、扱う画材や技法からどのように空間表現が推移していったのかを歴史的観点から述べており、私の空間表現との差異を明らかにしている。第3章では、私の立ち位置を見出し、私独自の自然観から選出した「主題」について言及している。そして、なぜ「人工的要素のない自然風景」を取り上げるのかを明らかにしている。また、その主題から創出したいくつかの自作品を取り上げ、その制作意図や目指したものについて詳しく述べる。第4章では、自作品を制作するにあたり、支持体の選択から自作品の制作手順について紹介する。ここで取り上げる自作品は2作品である。第5章では、「銀箔の変色防止実験」を行い、その研究結果と報告を述べている。油彩と銀箔を併用するにあたり「いかにして変色を免れるか」が最大の問題であり、変色を極力防ぐことができる方法を見出すための実験である。第6章は、青と銀箔の重層構造により創出した自作品について述べている。第7章は本論文における結論である。

私は、人工的要素のない自然をモチーフとして取り上げ、油彩と銀箔を併用して自然風景画を描いている。

現在まで描いてきた自作品を改めて振り返ることで、私は、偏ったこだわりを持って「自然風景」を「主題」として取り上げることに気づいた。そこには「深層心理の中にある闇」が関係しており、私が「自然に求める真の理由」を明らかにするためには自己分析を行なわなければならない。その自己分析から明確になった真の理由が、私独自の自然観を形成しており、人間や人工物、そして人的要素を感じるものまでをも排除していたのである。更に、その自然観が私の描く作品の「主題」「色」「視点」「材料」「技法」を決定していたことが明らかとなった。

私独自の自然観から取り上げた自然風景は、油彩と銀箔を併用して描いている。この「油彩と銀箔の併用」については、油彩と併用することで銀箔が変色してしまう危険性が高いということから、これまで併用表現しない方がよいと認識されてきた。つまり、油彩と銀箔は相性が悪いのである。しかし、私が描きたい「空間表現」には油彩の特徴の1つである「透明感」と箔の「反射」が必要である。その箔には、他の金属箔にはない銀箔の「冷たく鋭い輝き」が必要不可欠であった。また、銀箔の上に透明な絵の具を着彩することから、銀箔の輝きを損ねる変色をできる限り防ぐ方法を模索しなければならないと考えたのである。

こうした視点から、自然風景を取り上げた「主題の独自性」を言及し、「油彩と銀箔を併用」した「空間表現」の新たな可能性を追求しながら掘り下げていく。

本論文は、私の制作した絵画におけるコンセプトとそれを具体化するための技術に対する実験と考察、および作家論の論考である。

[審査結果の要旨]

本博士学位請求論文は、「透明技法における空間表現の研究～青と銀箔の重層構造による空間表現～」と題して書かれたもので、青の油彩絵の具の重ね描き（グレイズ技法）と銀箔を併用し、重層的な空間表現を実制作で実現するための技法的可能性を追求する研究と実験を記録し、実制作を補完する理論的考察を行うものである。

筆者は本学に入学して以来、油彩の主題として一貫して取り上げてきたのは自然風景である。しかも一切の人工的要素を排除した自然風景である。その背景には宗教的、風土的、歴史的要因ばかりでなく、筆者の個人的な体験に根差した自然観がある。本論文は、筆者の自然風景の根底にあるコンセプトを解き明かし、それを具現化するための技法についての考察と実験の記録である。

本論文は、「第1章、第2章、第3章、第4章、第5章、第6章、第7章、謝辞、参考文献、注、資料」という目次で、本文が全7章、総頁数115頁により構成されている。

「第1章 序論」では、まず宗教や風土に根ざす日本と西洋の自然観の相違が考察される。両者の自然観と接点を持ちながら形成された筆者自身の自然観の立ち位置を確認するためである。次に、筆者の自然観を表出する自然風景を実現するために2つの技法が提示される。ひとつは「グレイズ技法」である。この技法は油彩を重ね描きするもので、重層的な空間を生み出す。もうひとつは「銀箔」の使用である。銀箔の放つ冷たく鋭い光は絵の具では再現することはできない。銀箔の上に透明性のある絵の具を着彩することで、空間の演出も可能とする。筆者はこの2つの技法を「透明技法」と定義する。この技法が自然風景の中に筆者が求める重層的な空間表現を実現する核となるのである。

「第2章 時代における空間表現と技法上の問題」では、歴史的観点から、西洋絵画の画材や技法を分析し、空間表現の推移が考察される。筆者が本論で取り上げる2つの透明技法のルーツを検証することが目的である。絵の具の重ね描きを可能にする油彩技法は、中世から初期ルネサンス期にかけてイタリアで発明され、フランドルで完成され、近代にいたるまで受け継がれてきた。また金属箔に油絵の具を幾層にも重ねる技法のルーツも西洋中世にさかのぼる。西洋中世から近世、近代にいたる油彩技法の変遷を概観した結果、筆者が求める透明技法のルーツが、15世紀の北方ネーデルラントの画家ファン・エイクにあることが確認される。

「第3章 作品のモチーフとコンセプト」では、筆者自身に問題を引き寄せて、絵画制作におけるモチーフの選定とそこに託された理念が提示される。現代絵画の現状を分析し、あえてファン・エイクに立ち戻ろうとする根拠を述べたうえで、筆者が目指すのは「線遠近法的な目だましを用いた空間表現ではなく、純粋に絵画における透明層の重なりによって空間創出する方法」であることが明示される。

次に、筆者は、人工的要素のない自然風景をテーマにするにいたった経緯を個人的な体験を自己分析することで解明しようとする。さらに、こうした自然風景を実現するために「透明技法」のひとつ「グレイズ技法」でもつぱら「青」を用いる理由を、科学的、心理的側面および自己の経験から分析したのちに、今回審査の対象となった日光、中禅寺湖を描いた2点の「湖の水面を描いた連

作」、那須塩原市の板室の「川の水面を描いた作品」、および3点の「桜の樹シリーズ」をとりあげ、これらのテーマの何が筆者を駆り立てたのか、テーマを通じて何を表現しようとしたのかが具体的に語られる。水の作品では透明な青い水の深みの描出が、桜シリーズでは青い大気の層的空間の描出がテーマだが、それを実現するのが、青い絵の具を用いたグレイズ技法と銀箔を併用した「透明技法」にほかならない。

「第4章 制作および技法」では、執筆者の制作についての手順が具体的かつ詳細に説明される。まず支持体について、筆者が開発したハニカムパネルの構造とその効果が詳述され、ついで下地塗りの手順と研磨作業について具体的に記述される。こうした下準備は筆者のめざす円滑な画表面を達成するために欠かすことができない。さらに、それに続く制作の過程が、中禅寺湖と桜をテーマにした2点の作品をとりあげて、青を重ねる透明技法に焦点を当て、下描きから着彩にいたるまでカラー写真を添付して、順をおって克明に説明される。

「第5章 箔に関する実験と研究」は、筆者の風景画の核となる油彩の重ね描きと金属箔の併用についての実験の記録である。まず中世イタリアで生まれた箔の上に油彩を施す伝統的技法 *pictura translucida* を検証し、サファイアのような透明感と質感を有した鉱物の再現を試み、成功させた。次に、自身の作品制作に使用する箔についての実験が開始される。筆者が金属箔に求める効果は銀白色系の輝きである。4種類の金属箔を試作・分析し、その目的に適合する金属箔を銀に選定した。しかし、銀箔の最大の欠点は酸化による変色である。次に銀箔の変色を防止するための実験が開始される。4種類の接着剤と4種類のワニスを用意し、それぞれを組み合わせる試作を行い、その経過と結果がカラー写真を添えて、明瞭かつ詳細に記録されている。結果的に、水性ミッショナーネによる接着ならびにアルコール性であるテンペラワニスでの表面保護が最も有効であることが判明した。

「第6章 自作品についての論考」では、1) 湖の水面を描いた連作2点、2) 川の水面を描いた作品、3) 桜の樹シリーズ(3点)について、テーマ選択の動機と自身の体験、および作品のなかに実現しようとした理念が語られる。自作品を分析し、青い絵の具を用いた重ね描きと銀箔を併用した重層構造によって自身の絵画コンセプトが具体化されていることが確認される。

「第7章 結論」は、これまでの研究経緯と論考をふまえて、青い絵の具を用いた重ね描きと銀箔の重層構造をなす「透明技法」の意義とその成果が強調されるとともに、この段階で未解決で終わっている問題を含めて、今後の作品制作に関する展望が述べられている。

ところで、制作された作品を含めての論文についての評価であるが、テーマおよび方法論において独創性がうかがわれる。筆者が作品のなかに求めるものは、「自然そのもの」の再現である。その自然を自己の体験を引き合いに出しながら、歴史的、宗教的、科学的視点も加えて定義したのちに、その実現のためにたどり着いたのが、青い絵の具を用いた重ね描きと銀箔を用いる2つの技法である。筆者はそれを重層的「透明技法」と定義し、歴史的な検証を踏まえて実験を繰り返し、改良を加え、独自の絵画コンセプトを実現する技法として確立した。とりわけ銀箔については、黒変を防ぎ銀本来の輝きを維持することを可能にする技法の検証はこれまでなされたことはなかった。銀箔

の最大の難点とされていた問題に取り組み、変色を防止する一定の解決策にたどり着いたのは本論の重要な成果のひとつである。

青い絵の具を用いた重ね描きと銀箔の重層的「透明技法」を用いた筆者の作品は、制作の行程上、短時間に完成することは不可能で、それほど多くの作品は制作されてはいないが、完成作において、この2つの技法が共鳴しながら深く透明な空間を内包する風景画を生み出している。また、平成27年の第69回「女流画家協会展」に入選を果たすなど、積極的な活動を続けている。本論文は、こうした筆者の作品を丹念かつ十分に言葉で説明していると言えよう。一方、今回の実験のなかで新たな問題点も浮かび上がってきた。今後、それらを整理し、研究を続行し、より汎用性の高い箔の使用法に到達することが望まれる。

以上、手塚沙織「透明技法における空間表現の研究～青と銀箔の重層構造による空間表現～」の学位請求論文の審査に関しては、審査員全員により「合格」と判断され、博士の学位を受けるに十分な資格があるものと認める。